町民文芸

只見短歌会　令和三年九月詠草

妹の背のいささかに丸くなり懐かしみ思ふ亡き母の背に　馬場　八智

ドッコイショヨイショとやうやく立ち上がり手摺にもたれ青山眺む　渡部ゆき子

年よりの挨拶一言転ぶなと一挙一動足元を見ゆ　関谷登美子

来るたびに孫のねだるる手作りのフレンチトースト毎週作る　新国由紀子

抜かれても次々生ゆる雑草に追われし日々もはや秋の空　渡部ヨリ子

新聞の週毎に載るクイズ版頭（ず）のリハビリと今朝も待ちゐる　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　九月定例会　宇多喜代子　指導

秋の雨眼鏡を替えて読む手紙　一穂

手拍子であんよ促す秋日和　修一

新じゃがや幼き頃の囲炉裏端　一恵

牛蒡の葉我が物顔に畑占める　真理子

ゴーヤの疣列島の皺と比べても　幸生

ボタン一つ痩せて米寿の猛暑かな　睦子

ひとときの賑わいありし村祭り　信

林檎食む吾子のまなざし人を見る　恒夫

秋雨の力をもらう野菜達　都

秋空に飛び立つ鳥に「さようなら」　礼

炎昼や物音一瞬跡絶えたり　弘子

夏休みなれぬ手付きに米を研ぐ

秋簾客の一間を巻きあげて

古民家や秋の風鈴鳴りにけり

そよ風にささやきあふて秋桜

長電話秋の日暮や共に老ゆ

稜線を離れる月の力かな

折り鶴に息吹き入れん火が恋し